



録画した人物像をアバターに変換した画像（右）。AIが識別した毛髪や服の色、姿勢などの特徴を表している＝山内寛紀・立命館大教授提供

カメラ映像 分身に変身

立命館大など

ビデオカメラに映った大勢の人物を、服の色やしぐさで描き分けて人形のような「アバター」（分身）で表示するソフトウェアを、立命館大学などのグループが開発した。顧客や通行人のプライバシーを侵害せずに店の混み具合や雰囲気を実タイム表示することができる。商業施設や交通機関での需要が見込まれるという。

立命館大理工学部の山内寛紀教授（画像認識工学）が、日本画像認識協会（東京）や電機メーカーなどと共同で開発した。カメラがとらえた生画像から人工知能（AI）が人物を識別。画面に映ったすべての人をアバターに変換す

AIが処理 プライバシー配慮

る。毛髪や服装の色のほか、姿勢や歩き方を類型化し、強調して表示する。

さらに、AIが判別した身長や体格、性別もアバターに反映する改良版を開発中という。人物の特定にはつながらず、個人情報保護法に触れない要素のみを抜き出して表示できる。

通常のビデオ映像は奥行きを感知できないため、従来の画像検知システムでは通行人が大勢映ると個々の人物を追えないことが多かった。だが、このシステムでは人物を個別に識別するため、従来難しかった雑踏に不審物を置き去りにする行為も感知できるという。

山内教授は「防犯カメラに組み込めば、個人のプライバシーを侵害しないで店内の混み具合や雰囲気を公的な場所にも表示できるので、商業施設や道路の混雑緩和などに効果が期待できる」と話す。

一方、人物が歩く際の手足や体の動きを詳細に捕捉してアバターと結びつけると、個人の特定にも応用が可能という。安価な装置で個人を識別、認証できるため、研究グループは今回のソフトとは別に防犯向けのシステムも開発を進めている。

（永井靖二）